



道徳研究授業 ～ 外部講師を招いての道徳

1月23日(火), 1学年全クラスで「外部講師を招いての道徳」研究授業を実施しました。

1組は、消防士である藤本重雄さん。藤本さんは東日本大震災の折に、東北地方へ出向き、救助活動や復興支援にたずさわった方です。その体験談を伺い、人のことを思って動くことの崇高さや難しさ・葛藤などについて考えました。



2組は、声楽家の杉田博子さん。杉田さんは、ピアノが得意で中学生の時には「音楽大学に進学したい」と考えていたそうです。しかし、音楽の中では苦手意識のあった「歌うこと」の道を歩むことになり、現在声楽家として活躍された方です。ドイツに留学したことや歌の魅力について伺い、充実した生き方について考えました。



3組は、助産師の鈴木美恵子さん。鈴木さんには、お母さんのおなかの中にある赤ちゃんの人形や映像・心臓の音などを提示していただき、命の大切さを考えました。



道徳は平成31年度から国語や数学等と同じように教科になります。本校では20年以上前から外部講師を招いての道徳を行っていますので、教科になっても継続していきたいと考えています。

新入生説明会 ～ 伝統の合唱などで歓迎

新入生説明会では、吹奏楽の演奏や2学年合唱「光の中で」で歓迎し、1年生代表が堂々と「中学校生活で感じたこと」を発表しました。

皆さん、こんにちは。今日は1年間、中学校生活を送る中で感じたことを3つ話そうと思います。

1つ目は、1回1回の授業を大切にしていかなければならないと云うことです。中学校では、小学校と違い、教科ごとに先生が替わります。そして、中間テストや期末テストなどの定期テストがあり、授業で学んだことがそのままテスト範囲になります。また、毎日宿題があるわけではありませんので、その分は自分で考えて勉強をしなければなりません。

2つ目は、部活動が楽しいと云うことです。練習は辛いこともありますが、試合に勝つことができるようになったり、できなかったことができるようになるのと充実感や達成感を味わうことができます。また、「先輩は怖い」という印象があるかと思いますが、優しく接してくれて、いろいろなことを教えてくれます。とても仲良くなれます。言葉遣いや接し方をしっかりと覚えて、分からないことは何でも先輩に聞いてください。

3つ目は、すみよし祭です。生徒会最大行事であるすみよし祭では、全校生徒一丸となって、すみよし祭を成功させようという雰囲気があります。ブロックや学年、クラスでの取組を通して、力を合わせて協力することの大切さや楽しさを感じました。

私も最初は、不安で戸惑うこともありましたが、実際に中学校生活を送る中で、その不安は達成感や充実感に変わっていきました。そして、都留一中での生活がとても楽しくなりました。

分からないことがありましたら、気軽に先輩や先生方に聞いてください。そして、いっしょに楽しい学校生活を送りましょう。皆さんの入学を心からお待ちしております。



私の好きな一冊 今月号は天野香奈先生 山口るみ先生

「スメル男」 原田宗典著

もう十年以上前の話だが、今の学校司書に就く前の職場で私は昼食を終えた後に本を読むことを習慣としていた。その様子を見ていた先輩がある時、「この本面白いから読んでみて」と薦めてくれたのが『スメル男』という本だ。直訳すると「臭い男」。食後に読むにはどうにも相応しくないようなタイトルだったが、その先輩は薦めると同時に本を私の手元に置いていったので、読んだ感想を伝えない訳にもいかず、次の日から私は昼休みにこの『スメル男』を読み始めた。

結論からいうと抜群に面白かった。東京全都に広がる悪臭を放つ体になってしまった青年の話。この説明だけではふざけているとしか思えないのだが、自分の体臭に悩み苦しむ青年と彼の周りで巻き起こる予想もつかない展開が、どんどんと私をこの作品に惹きつけていく。特に、このスメル男の前に突然現れた、敵とも味方とも知れぬ天才少年の登場で完全にハマった。読後、この本を貸してくれた先輩に熱烈なお礼を申し上げたことは言うまでもない。

自分の意思では決して手に取ることはなかったであろう本にこんなにも心揺さぶられた思い出は、運命の本との出会いとして今でも私の心に強く残っている。一年間で約八万冊もの本が出版されていても、本当に面白かった、この本好きだなと思えるものに出会うのは難しい。ましてや人の好みはそれぞれで、面白いかそうでないかも感じ方は個人によって違う。そんな中、この本に少しでも興味を持ってくれ、面白かったと思ってくれる人がかかひとりでもいたらこんなに嬉しいことはない。

(文責:天野香奈先生)

「武器より一冊の本をください 少女マララ・ユスフザイの祈り」 ヴィヴィアナ・マツァ(著)

「マララ・ユスフザイ」という少女を知っていますか。どのような子か知らなくても、名前だけは知っているという人もいます。

このマララさんは、インドの西にあるパキスタンという国の少女です。写真からわかるように「イスラム教」を信じ、また、国連で世界各国の大使たちを前に「一人の子ども、一人の教師、一冊の本、一本のペン。それで世界は変えられる」とスピーチした少女です。このスピーチは有名ですね。

彼女がどのような教育を受けたのか、また、どのような環境の中で日々の生活を営んでいたのか、詳しくは分かりません。しかし、彼女がとても優秀で、自分の考えをしっかりと持ち、もっと勉強したいと願い、学んだことを生かすことによって平和が作り出されると考えていたことは、よく分かります。この本を読むに当たって、「ちがいはかりに目を向けず、自分と似たところも探して下さい」と書かれていました。しかし、読み進めていく過程で「似たところ」よりも「ちがうところ」ばかりが目につき、「すごい子なんだな～」と感心してばかりでした。

読み終わってみて、あらためて実感することがありました。それは「ちがいを知るところ」から「理解が始まる」ということです。それは、争いをなくし、世界平和の実現の第一歩になるのだということでもあります。

難しく考えずに、「パキスタンの女の子の生活を知ろう」というような気持ちで読んでみて下さい。図書室にありますよ。

(文責:山口るみ先生)